

台湾の高等女学校研究

—インタビューにみる女学生生活とその背景(その二)—

山 本 禮 子

五 賢母良妻の理念を堅持して活躍する女性議員

台湾婦女会をリードし、またその支援で国民党議員として活躍してきた三人の女性は、妻としての母としての節操を明確に打ち出す生活倫理を異口同音に語りはじめる。

「台北第三高女卒業です。父は台北大学の卒業、母は第三高女卒業で、現在九十歳で健在です。元小学校教員で十七年間勤めました。第三高女卒業後、花嫁修行をして結婚、夫は林野庁の第一代の局長として三十年間勤めました。その間、明治神宮改築があり、台湾から銘木を送ったことがあります。妊娠中、皇太子と美智子妃のご成婚があり、息子(次男)の名前に皇太子の明仁の名をつけました。

県会議員として一期勤め、二年休んで衆議院にしました。

四期勤めましたが、五期目は落選、その後は立候補を断念し、参議院議員の息子(ニューヨーク大学出身)に譲りました。

衆議院議員の間、日本の小沢一郎、土井たか子、山口淑子、安西愛子との交流がありました。その頃、高雄の知事と共に淑徳女子専門学校の客員教授になったことがあります。長男夫婦は医学院出身の医師です。

四〇年頃、近畿大学にいき、法学部を卒業しました。その後、アメリカの大学での研究という名目で、養老院・託児所の見学・視察をしました。現在は、婦女会の仕事に関わっています。

私は、政治に携わっても、婦徳・貞操は堅持しました。例えば、つき合いでもアルコールは一切飲まないし、社交ダンスも夫以外の男性とは出来ないといって断ります。このよう

な議員もいることを明瞭にしたかったです。

小学校四年から六年までの三年間日本の先生の家に預けられました。自家用三輪車で通うほど金持ちでしたので、そのお宅にはずいぶん貢いだと思います。そこで、客の時のお茶の出し方、襖のあけ方をはじめ、布団の出し入れは三分間でするようになどをしつけられました。母は男五人女三人の子どもに一人ずつ乳母をつけ、計八人雇いました。しかし、女中はいるが下着は自分で洗うことを義務づけるのです。そして子どもが小学校に入ると、乳母を帰します。娘の私の時も三人の子どものために、乳母を里が出してくれました。刺繍も上手、編み物もやるほどの人です。台湾光復後は父親が材木商をやりましたので、教師を退職しました。そして、会社の人全員到北京語を習わせたとき自分も北京語を学習していました。九十歳の今も、刺繍をしたり、一日に一枚毛糸のセーターを編んでいるほどです。」

「この母にしてこの娘あり」の手本を示されたような感じ、由緒ある家系、それだけにその時代に合う教育をとの配慮が、日本人教師宅への下宿による行儀見習いとなったと思われる。同じく婦女会の台湾省婦女聯誼会会長として活躍する方、最年少で議員に当選した方の発言が続く。

「わたしは台南の長栄高女を昭和十二年に卒業しました。

教員養成所を経て教師になり、八年間公学校および国民学校に勤務しました。公学校の校長先生の奥様に池坊の生花を週一回習っていました。当時の公学校では台湾の先生は少なく一人だけでした。その後、東京高等女学院の高雄分校で高等洋裁を二年間学びました。光復後は、初級中学校で家事・音楽の教師として三十三年間勤務、五十五歳の定年で退職しました。

息子は、十万円を持って日本に留学、築地でアルバイトをしながら東京教育大学の修士課程を修了し、娘も一橋大学の修士課程を修了しました。そのほか薬剤士、高等師範を出て中山高等中学校の教師、台北医学院の講師をしている娘たちがいます。」

「台北第三高女を昭和十三年に卒業しています。参議院議員に二十五歳で当選、女性で最年少でした。二十六歳の時、国民党代表として南京に行きました。七十一歳で退職し、現在は、初当選したとき妊娠中だったその時の息子が跡を継いでいます。議員として活躍する一方で、子供の教育には最大の配慮をしました。夜、鞆の中を見て子どもの様子を把握するとか、三度の食事は家族で共にすることをきちんと守ることに、都合の悪いときは子どもの着る服の用意をしておくというような心遣いをしました。家庭と社会の二重の責任を果た

すべく努力をしました。五人の子どもの内、四人は台湾の大学を卒業してアメリカの大学に行き、一人は台湾の初級中学校卒業後、アメリカの学校に進学しました。すべて良妻賢母を全うしたと思っています。現在、第三高女卒業生の同窓会の会長をしています」

十人に一人は女性を政界に送り出すと規定している台湾で、立法院の議員として活躍している女性の「婦徳」を遵守する固い決意に頭が下がる。家庭を省み、子女の教育に万全の配慮を払う姿勢、出身階層の良さを示す子ども一人ひとりにつける乳母・女中の例は、この度の台湾でのインタビューで何回か耳にしたことであった。

なお、子ども達のアメリカ、日本等の留学は、当時の台湾の政情不安とも絡んで、多くの家庭で積極的であった。

六 高齢者クリスチャンが集う玉蘭荘で

八月十七日、台北市敦化南路一段にあるビル十二階に曜日を決めて日本語を話すクリスチャンが集うという玉蘭荘で、台北第三高女卒業生五名、長栄高女卒業生三名の方々が集まってきた。

「台北第三高女を昭和十九年に卒業し、その後、郷里に帰って小学校の先生をしておりました。正式の教員ではな

かったのですが、四年くらいやって、結婚で退職しました」

「卒業後教員を三年やりました。結婚して主婦専業です。最近はお子の手が離れましたので、教会関係や玉蘭荘のことをやっています。両親もクリスチャンで、私で三代目になります」

「昭和十九年卒業。教員を四年やっています。当時、代用教員といっていました。日本人男性は戦争に行ってしまうし、先生が足りませんでした」

「卒業後、台湾拓殖株式会社に二年勤めました。終戦の頃家庭に入りました。私は自分の家の近くの教会を捜しました。その教会は李春生教会といって長老教会です。私はそこに所属しています。母は組合教会です。日本時代に、親しい家族が数名集まり、その中に張さんというクリスチャンのおばさんがいて牧師にも来ていただいて集会をするのです。讃美歌を歌ったり聖書の話しをしていたり、それが始まりで家族の人達が救われ、今ではそこが教会になっているのです。中華公理堂教会といいます」

「私は女学校を出て師範女子部に入ったのです。そして終戦の年、疎開先の小学校の先生でした。半年ぐらい中国語を習いながら教えたのですが、ダメだと思ったので廃業して銀

行に勤めました。三、四年後、結婚して家庭に入りました」

「中国語が全く分からなくて、大変でしたね」

「全くね。今日習ったものを明日教えるのですから」

「今だったら耳が慣れて分かるんですけど、当時は全然分からなくてね」

「私は子どもが四人いて、皆マスターを出てそのうち一人が博士号を取り、日本の岡山大学の病院に勤めています。娘三人の内二人はアメリカで結婚し、一人が台湾の高雄にいます。息子は台湾の医学院を出て、岡山の大学院に入りました。もう十二年か十三年日本にいます。今は帰化して、開業する準備をしているようです」

「私は終戦後に長栄高級女子中学校に入学、そこを卒業しました。ですからそこでは、すでに日本語の教育ではありませんでした。日本語が達者なのは、小学校に入学し、そこで習ったからです。それに自分で本を読んだりしましたし、戦争中、国語常用家庭で、お父さんもお母さんも日本語を使っていました。長栄高女卒業後、花嫁修行をして二十二歳で結婚しました」

「小学校の頃は、空襲で毎日防空壕に入っていました。入学した時はまだ日本の先生がいらっしゃる時で、日本語を使ってたんですよ。長栄への入学の動機も日本の先生がいら

したからです。番匠先生やいろんな先生が全部日本にお帰りになってから、北京語を習い始めたのです。先生方は夜習いに行つて、翌日生徒に教えるという状況、とても簡単な言葉の学習でしたね。でも、あの時はとても辛かったです。先生方は子ども達の前で一体何を話したらいいか分からないのです。私の北京語は大学に入ってから習ったといつてよいでしょうね」

「私は昭和十五年入学です。紀元は二千六百年という歌が歌われたときが一年生でした。卒業後、国民学校の先生を二年間勤めました。終戦の年に結婚しました。二人の娘と男の子が三人です。留学していた子も最近帰国してきて、現在は皆台湾にいます」

「私は昭和十四年に卒業しました。卒業後、訓練所みたいな所に行つて教員をしました。住んでいたところが田舎で、戦時中だったため学校の先生が足りなくて、女学校を出たらほとんど教員に駆り出されたのです。今で言う代用教員ですね。子どもは男の子四人、孫男四人に女四人。主人は名古屋の薬学系の大学を出ています。二年教師をして、その後結婚しました。現在、校友会総会の会長を務めています。長栄女学校の校友会は五つの支部に別れて活動しています」

「私はクリスチャンではなかったのですが、長栄に入り、

神様のお恵みがあつて宗教教育を受け、私の家の向かいに南門教会が設立され、そこで始めて教会生活に入りました」

一通りの自己紹介を兼ねたお話から、在学中の差別について、また高等女学校教育の意義についての感想を述べてもらう。

「いじめについては、小学校時代はあまり気にしないの。

三高女では先生によつてちよつとあつたでしょうか。生徒同士では、むしろ台湾人が人数の少ない日本人をいじめてました」

「三高女では温室で全然内外の差別を感じなかったけれど、師範（第一師範女子部）に入つたときには、やつぱりちよつとありましたね。師範は奨学金が出るでしょ。その時、日本の方は三十円、台湾の人は二十六円なのです。それで差別を痛切に感じました。あれを貰つたときにショックでした。ほんとにショックだった。女学校に入れる、あるいは入っている家庭は、日本人も一目おいています。だから差別を全然感じなかったのですが、奨学金を貰つたとき、私はほんとにショックでした。忘れることのできない思い出です」

「奨学金もそうですけど、卒業して勤務した小学校が、二高女出身の日本人が私の上なの。ほんとに師範を出た人が上なのに、第二高女の専攻科を出た人が上なのです。台湾籍だからそのほうが下なの。娘時代、身辺では感じなかったの

ですが、社会に出てみるとはつきり差別待遇が感じられました」

「長栄女学校にあのころクリスチャンの家庭はみんな入りましたけど、私みたいに他の公立高女を受けて滑って長栄に來た人がいます。そうすると、台南なら台南一女、台南二女それから長栄と序列があるんです。ことに戦時の時代は區別されて変な目で見られてました。第一ミッシェンでしょ、台湾の女の子ばかり入っている学校として特別視していましたよ」

「今だから言えるのですが、私の兄は早稲田大学を出てそのまま中国に行つて、そこで新聞社に入社し、抗日の烈士としての仕事をしました。私の故郷の小さな公園に銅像が立っています。私の兄なんか早稲田に入つて、そこで何かを感じて中国に渡つたのだと思います。十三歳も違うのでその時は分からなかったけれど、戦後、初めて、兄が香港でどういう仕事をしてきたか、それが徐々に理解されてね。頭が良かったり、民族觀念の強い人は、やはり差別感をひしひしと身にかけていたと思います。」

今はこういうこと自由に話せますけど、あの時は相当苦しかったことでした。もちろん、私の父は田舎でちよつと知れていましたから、当時警察方面とかのひどい仕打ちはなかつ

たけど、ときどき、家宅搜索してたんです。父は国防献金などを一生懸命してたんですよ。中国に渡った兄はほとんど音信不通だったんです、だから警察が来て調べようにも、全然家族は知らないから調べようがなかったのです」

「台湾の人ばかりでなく、沖縄の人も差別されていました。日本の先生が、同じ教員でも沖縄の教員を軽蔑していたのを生徒は感じていました」。

「教員になって、始めは分からなかったけど、校長先生がとても辛く当たる先生がいました。後になってその方が沖縄の先生だと分かったのです」

「それからもう一つ。一般に日本の方ね、男の人より女の人がとてもいばるんです。警察官の奥さんとか、先生の奥さんとか、女の人がいばるんです」

「戦時中の教会は、天の神様は一つしか拝めないのですが、戦争が激しくなったときちゃんと神棚置いて、礼拝の前に拝んでいたという話を聞いています。家庭にも神棚を置くんですよ。教会も天照大神を拝み、宮城遥拝をしてから礼拝ということだったようです」

「長老教会は始めは台湾語でしたが、全部日本語で話さないといけなくなるのです。聖書も讃美歌も皆日本語に変えたのです。うちのおばあさんはその時七十歳を越えていたけど、

讃美歌を歌うために『あいうえお』から習ったのです。その意味はわからないけど、声を出して讃美歌を歌うために日本語を習ったのです」

「長栄女学校も英国の校長先生は帰国して、始めは植村先生、つぎに番匠先生がいっしょいました。番匠先生は牧師だったけど軍人だったんです。相当軍部といろんな駆け引きをしていたと思います」

「昭和十二年ごろ、日本の当時の天皇・皇后の写真は長栄女学校にもありました。神棚もありますよ。そして講堂に入って礼拝前にサンバイキュウハイをやりましたよ。三つ手をたたいて礼をするということをやりました」

「高等女学校教育については、食べるものも、着るものも、履くものもなかった時代だったけど、今考えたらそう悪くない。日本の植民地だったことも、結局私たちのよい体験だったと思う」

「あの時の教育制度は、私たちにとってやはりプラスになっていると思います。あの時の修身が一番だったと思うのです」

「四年間すべて良妻賢母たる資格をとる、そういう教育を受けてきたから。それは今でもやはり良かったと思います」

「私の家庭は厳しく、お父さんお母さんは先生だったから、

小学校時代、私を日本人の家庭に預けました。襖の開け方、お茶の出し方の礼儀作法など全部覚えるために先生の家に行きました。六年で女学校を受けるまで、先生が変わるとその先生のお宅へと、家ではいろんなお礼を持って行って、娘に日本の習慣やことば遣いを学ばせたのです」

多くの女学生にとって、中国へと渡った日本留学青年の想いを充分に理解することは当時は無理であろうが、月日の経つ中で植民地台湾の不条理な立場に思いを致すことになる。また、年老いた者にまで強要した日本語使用は、ただ神を声高らかに讃美したいただけに、「いろは」から学ぶその姿に感涙すると共に、あまりの非情に言葉を失う。また、権力を持つ日本人に倣うために、日本語を、また、日本の風習を身につけさせたいと願う親は、ただわが子の行く末の幸せを信じ、断腸の想いで子どもを他人の家に預けたのである。このような植民地政策の大きな過誤の中にあつて、なお、当時の教育の意義を一人ひとり評価している。それは、個々の教育が「人の道」に沿っていたからであろうか。永い目でみたときに、教育は真理を追求するための手だてとして活用できるために、プラスと評価できるのであるか。もつともそれに伴って流された代価も大きかったであろうか。マイナスをプラスに転換できるのが、神から与えられた人の知恵か？

七 三高女の方が語る教師論と二人の先生

「第三高女の先生の中には、生徒に対して不公平な取扱いがあつたと思います。私は、先生から他の人の模範で、これからは頑張つて将来あなたが一番になるのだから、この成績を保持するようと言われていました。しかし、紀元二千六百年の式典の時、一番の成績の私が代表になれなかったのです。二千六百年に出た人が割り込んだ訳だから、卒業の時も総代で賞状がもらえませんでした。私の父は当時上海にいたでしょ。そうでなければ私の家も引つ込んでいなかったと思います。その時、私は決心したの。こんな不公平なことがあると子どもたちに対する影響が大きいと。」

三高女には尊敬できる先生は数少なかったと思う。数学のO先生、国語のK先生、歴史のH先生は公平な方でした。作法のN先生も、この先生は厳しかったので反感を持たれた面はありますが……。私は道理を通した先生だと思うけど……。H先生は中学からいらしたので、赴任なさったとき、授業中も天井ばかりみていらして、女生徒の顔を見ることができなかった方でしたね。この先生は戦後、引揚船に乗船する前に交通事故に遭われました。トラックの上から落ちたのです。

A先生という音楽の先生は、点数に生徒の顔が入るの。先

生が楽譜を見て手を見るなどおしやるの。誰かが『先生、手を見て顔見るな』といったの。私、このことアンケートに書いたわ。(爆笑)

先生方に狸、牛、南瓜とかもぐら等のあだ名をつけていたのね。外見や性格などによって楽しんでつけていたのですね。教室で偉い先生に対して、蔭ながらつけていたのですね。楽しいわね。あだ名をつけたということは愛称でしょうね。

校長先生の修身はおもしろかったのです。例えば、異性と黒板に書かれると見てはいけないものを見るようなところがあったのですが、必要な事柄でしたね。良妻賢母では舅・姑に対して、旦那さんに対してどうあるべきかということと、時には甘えることが必要だとの話もありましたね。面白さも含まれながらの講義だったと思います。機微をうがったような話をなさいましたよ。校長先生はたいへん博学の方でした。

一番陰険にいじめた和裁の先生がいらした。この先生は表面では作り笑い、しかし職員会議で操行の悪い子を挙げ、その子が来なくなる。つまり退学になったということがありました。一番だしを取ったあとのものの扱いに対して、『あなた方よく解るのね』というその『わかるのね』の調子に、本当に偉いわというのではなく、何か一種独特なものがありましたね。刺

があるような感じでした。卒業式のあと、謝恩の辞を述べなさいといわれたが、どの先生へも謝恩の辞は述べられませんでした一度断ったほです。卒業式後、H先生にある友達のためにご挨拶にいったの。そしたら先生は皮肉たっぷりと『あなたは上海に行くのね。将来、有名になるでしょうね』と言うの。私は今でもその先生を尊敬できないのです。教育者として愛の心でもって生徒と接するのになかったら教育者ではないと思います。先生の中でも話題になったようです。一人の生徒を退学させるということは大きな問題です。そこまでしなくても考える先生もいらしたようですけど。その先生にかかると針小棒大にいわれるのです。

ある汽車通学の学生が恋愛問題で妊娠したという事件がありました。ある男の先生に呼ばれて事情を聞かれた。知らないとしらをきったのです。もう三日で卒業、ここで友達をかわわなければとの気持ちがあったの。先生はそのまま校長先生が待っているからと。級長の私を信頼しての質問だったのですが、嘘をついて最後まで友人を守りました。そのことを本人に告げることもないまま卒業してしまいました。その後無事出産なさったのです。人を助けるということの大切さを感じます。

チャンコロ、サンチャボ(三高女のこと)、リーヤ(下層

階級を呼ぶとき」という言葉を日本人が使っていました、それをよしとしない先生もいらっしやいました。出征なさる先生との別れで泣いたとき、ある先生が日本人は泣かないのですといわれた言葉は忘れられません」

母校三高女の手芸教師だった揚恙治先生のお宅を、台北三高女卒業生で同窓会会長郭林碧連さんの先導でお邪魔する。揚先生の日本名は新木登志子、台北第三高女卒業後女子美術専門学校高等師範科・刺繍科に進み、その後母校の教師として定年まで勤めた方である。八十歳前後であろうかと思われるが、今も手芸の制作に余念がなく、種々の展覧会に出品なさっている。その先生の近年の制作品を拝見させていただく。たいへん大作が多く、部屋一杯におかれた作品の一つひとつに独創性と斬新性を感じさせられた。年齢に比し、迫力を感じさせる作品は、先生の若さを物語る。

「昔の教育はよかったとおもいます。現在の教育は言行不一致です。その点、天地の差ともいえるのではないのでしょうか。昔の修身教育、作法の復活が望まれます。女学校では一年から四年まで、一緒に遊び、一緒に勉強していましたし、本当に自由な風がみなぎっていたのです。まだ、戦後十年間はよいところが残っていたように思いますが、今は嘆かわ

しい状況ですね。

私は、卒業後上海に花嫁修行に行き、フランス系のカトリックの修道会で二年間フランス刺繍やピアノを習っていました。その後、日本の女子美術専門学校にいったのです。

公学校卒業後、第三高女に進学しました。高女の国語の先生は厳しかったことを思い出します。その時は黙っていました、『今に見ている』と思っていました。なぜなら侮辱感を感じていましたから。

刺繍は二年に一度、皇后に献上していました。また、ご下賜金がありました。

私は、人間としてどうあるべきかを強調したいのです。陋習は破って行くべきです。八十五周年を迎える母校と本当に手を結んで行きたいと願います。その一貫として同窓会は無料で日本語を生徒に教えてきました。

女学校では、竹組に日本人が多かったですね。私の教師としての俸給は百円でしたが、日本人は確か百五十円位あったと思います。違いは歴然としていましたね」

静かな物腰と言葉遣いの中に、毅然とした態度・信念が伺われる方であった。揚先生のご主人は弁護士だったが、二・二八事件で殺害されたという。そのことには一言もお触れにならないだけに、吐露できない深い悲哀感、光復後のある一時期の無

情さに想いを馳せ、私共も言葉にならなかった。

案内してくださった郭林さんには、次年度の夏もお目にかかる。ご病気のご主人を看取りながら、事業の方も責任を持たれ、実業界を担う聡明さと逞しい女性の片鱗を窺う想いであつた。

母校、中山女子高級中学校の元教師蔡姝華さんは台北第三高女の二十一期生である。卒業後、台湾師範大学音楽学科に進学、定年まで母校中山女子高等学校の教師を勤めた。国民党に入党しないと学校内で役職につけない暗黙の規定に対し、それを拒否しそのまま平教員として勤務し続けた。その頃からボランティア活動の一貫として青年達に日本語を教えている。しかし、日本語や北京語のように台湾語を自由にしゃべれないので、自分なりに活動分野を限定した面があるという。定年後は、広く社会教育の分野で活躍しておられる。たとえば、ボランティアとしてガールスカート関係の仕事に関わり、団員を連れて日本訪問の責任を負い、多忙な日々を過ごしておられる。そのため、あいに日程が合わず、出発前の多忙な時間を割いて台湾の教育事情の一端を伺う。

「三年前まで台湾では国定教科書でしたが、検定になったのでその教科書を作るために、ボランティアでその資料を日本の教科書から求めています。日本語ができるため、資料収集

には私は重宝がられたと思います。もちろん教科書は中国語です。師範大学の先生が中心になり、それに現場の教師も加わってグループを作って、資料を集めたり、研究会を月一回か二回やっています。それは公立の国民中学の音楽の教科書づくりです。三年間で完成する予定ではじめたのですが、責任者の逝去ということがあり現在も続いています。

戦後は国家公務員の待遇が悪かったのですが、今は身分が保証され保険も適用されるようになって、待遇は改善されてきています。台湾の学校制度は国民中学の上が高級中学です。さらにその上に大学と専科學校、この専科學校には二年制と三年制があります。これと並んで商科・工科・美術・演劇等の三年制の高級職業学校があります。これには四年制の夜間部が併設されています。女教師は女子の高級中学には多いのですが、男子校には少ないのが現状です。六・三・三・四制度で日本と同じといえます」

八 日本人同窓生、女性史研究者を囲む

台北のとある町角にある日本料理店、中村信子さんの案内で招じいれられた店内の和室にすでに十名の方々が集まっている。蘭陽高女に在学していた中村さんの手配で同窓生が集合。植民地時代、女学校を当地で過ごした中村さんは、当時の女性の暮

らしをはじめ民衆の想いを筆に託して執筆活動をして、最近『植民地台湾の日本女性生活史明治篇Ⅰ』（現代アジア叢書

1995.12.8）を筆名竹中信子で刊行、続編を執筆中である。そのためならば台湾を訪問し取材活動をすると共に、日本でも資料収集に精力的に取り組んでいる女性史研究者である。中村さんを囲んで、和氣藹々で雰囲気は最高潮に達するといった賑やかさであった。

「高等女学校への入学者は少なかった時代です。でも、本人の能力があり、家の経済力があると見なされていたのでぜひ入りたいと思ったし、親も進学させたいと思っていました」

「とくに日本語もできるし、となると本人も親も切望していましたね。高女進学は日本人も台湾人も同じです」

「国語の授業で和歌あり、五七五七七で詠んだのを覚えてるよ。『父上が会いたいでしょ 弟や ○○（聞き取れない）の中で 静かに眠れ』先生が佳作だとおっしゃったのです。音楽は、始めはモーツァルトなどあったが、後では日本の歌ばかりでした。裁縫は厳しかったし、材料に困ったことを思い出します。毛糸もなかったし。しかし、胸当てのついた国防色のもんぺを上級生が縫って下さったのが嬉しかったですね。生地は各自が持ってきて国防色に染めたので、少し

色合いが違っていました」

「蘭陽高女は、日本人と台湾人は半々で差別はなかったと思います。ただし受験時の差別はあったと思いますが、女学校に入ってから台湾人でも級長になれたのです。小学校時代は男女の差別がありました」

「でも、日用品の配給の時の差別がありましたよ」

「『ちゃんころ』というと怒ったことを覚えています。個人による差別はありました」

「お母さんが高砂族だった方がいたけど、最近知ったわけ。その頃は知らなかったぐらい、差別がなかったとも言えるんじゃないかしら」

卒業後の進路は、職業につかれた方が九人。そのうち国民学校教員になった二人の方は四十年あまり勤続だという。また、監獄の法務員十五年、試験を受けて資格をとった努力家もいる。あとの人は一年から四、五年で退職している。職業生活と子育ての両立には、自分の親、あるいは姑の手を借りている。ある人は六人の子どもがいたが、婚養子でもあり、本人の親の全面的援助によって職業生活を貫いている。卒業後すぐ、結婚した人は一人というほど、光復直後の蘭陽高女に在学した台湾女性の就職率の高いことに驚嘆した。

高等女学校の思い出については、異口同音に、「懐かしい」

「楽しかった」「勤労奉仕はあったけど、農家に行った思い出は懐かしい」の言葉が返ってくる。

最後に、中村さんは「民族の違う人と勉強したことは本当によかったと思っています。自分たちの国だけでなく他の国の人々との接点を持って、広い視野を持てたと思います」とくに「母が沖縄の出身で、友達からの差別観があったし、また、就職でもあったのは事実です」との言葉は、ずしりと重い課題を筆者に残した。中村さんの現在の活動の原動力の一端は、このような体験に基づくものだ実感した。

台湾語と日本語とが会食と共に飛び交う中で、中村さんの透き通るような声が一段とさえ、集った人々が本当に一つの輪になって再会を喜び合っていた。これが本当の日本と台湾の交流であり、中村さんの架け橋としての役割、また実績があると思わされた。

九 家政女学校での日本時代の教育

八月十九日の午後、羅東家政女学校卒業生の方々が、台北のあるレストランに集まってくださる。埼玉大学に留学し、現在国立経済研究所勤務の劉伯立先生の母君の同窓生である。

「羅東には、羅東中学とこの家政女学校が中等教育機関としてありました。私は三星小学校から、家政女学校に一人だ

けの進学でした。国語家庭で改姓名していました。しかし、小学校では唾みたいに黙っていたことを覚えています。二学級三学年で三分の二は日本人で、本島人は三分の一足らずでした。修身は女の先生で、薙刀と音楽も担当していました。セーラーカラーからもんぺに変わったことは残念でした」「T先生は二回くらい台湾の家を訪問しました。でもそれは悪いことをしたときでしたね」

「修身は精神訓話・時局のニュースがあり、無言の行もありました。正座や礼儀作法の時間もありました」

「勤労奉仕で一メートル四方を耕し、作物を植えたりという労働もずいぶんしましたね」

「戦時下でしたので軍服洗い、ゲットウ刈（植えたひまの繊維をとるため）をしながら、作法をならい、様々な場面でのエチケットを学びました」

「一年の時は英語もありました。でもアクセントが違っていましたね」

「私は、どういうふうに生きるかを学んだと思います。礼儀作法、家事のこと、着物の仮縫い・刺繍・編み物等を思い出します」

「光復後は、師範学校の夜間の専科に入り、教員になりました。夕方、校長先生と一緒に北京語の講習を受け、勉強し

たことをつぎの日、子どもたちに教えるのです。二、三年やりました」

「私は師範学校普通科にいき、四十一年間小学校の教師をしました。他の人で検定で教師になった人もいます」

「四十年間現役の教員生活。羅東の国民学校で五、六年生の担任でした」

「私は五年間勤め、台北で結婚しました」

「羅東の農業組合の会計として三十年勤めました。退職後は家事に専念です」

「おじいさんが漢方医だったので、薬局をやりました。結婚後眼鏡店を営んでいます」

「三十年余り勤め、定年前に辞めて今は旅行をして楽しんでいます」

「女子師範学校を卒業し義務三年後もつづけ、とうとう四十年国民学校に勤めました。子育て・家事はお手伝いさんの力を借りました」

「終戦後半年くらいは学校が開校されていなかったのです。私はさらに三ヶ月休学しました。その間、祖父が漢文をやっていましたので少し習ったのです。しかし、皆に誘われて北京語の学習のために学校に戻りました。祖父に習っていたため、入学当初は一番でしたが、卒業するときは終わりの方で

した」

「差別についての思い出は、弟が勉強の上でのことではないのですが、差別を受けました。日本人はバリカンで髪の毛をかりますが、台湾では剃刀でそるのです。そうすると二ヶ月はもつのですが、日本人におはつと言ったたかれています。それから、日の丸弁当の時、下の方に肉を入れて見つけたときもありました」

「陽明山に疎開して差別を感じなくなりました」

「日本の教育は成功したと思う。日本人のつもりだったので、敗戦で泣きました。日本の先生は尊敬されています。だから、今も旅費を出して台湾に招くのです。問題もあったと思いますが、日本教育が良かったからだと思います」

「算盤が職業で役に立ったと思っています。数学の中で、あるいは教師として成績の時にも算盤を使用していました」

「大和魂の精神が残っていて今も何でも出来るという自信があります」

「教科で役にたっているものは数学、作法、それから日本の歴史、地理です。女子は女の子らしくという精神、生活の規律、忍耐力等が身についています」

子どもたちの教育への質問に対し、半数の五人の方の子女が海外に留学しているのに驚く。「二人の中一人が日本留学」、

「娘が大学修了後アメリカに三年、息子は台湾」「一人娘がアメリカ二年目マスターに在学」「娘が音楽で日本の洗足学園に留学」「息子四人は台湾、娘はアメリカに留学し、そこで結婚、永住する」といった具合である。政情不安の時期は、多くの人が海外に移住しようだが、現在男性は高校卒業後二年間の兵役があり、留学のチャンスを逸する傾向にあるともいえる。日本と対比してその率の高さに驚く。当然、大学のレベルの高さに左右されると考えるが、今日の台湾の大学は世界に対して遜色がない水準であるといえる。否、かえって台湾の大学でドクターを取った卒業者の方が、要職につく可能性が高くなっているのが現状である。

十 「議会で台湾人は台湾語を話そう」

八月二十三日、国立中興大学農學院教授黃讚先生夫人の紹介で台中、彰化高女卒業生の十一名と面談、会食をする。

「立法院の議員だったとき、議長に『台湾人が台湾語で話すのはなぜ悪い』と言ったら議長は決然と立ちました。議庁内の警察官は『そんな女性みたことない』というのです。大陸は大陸の言語で、台湾は台湾語で、わからなければ勉強しろというのが私の信念です。

竹山小学校に入学、五歳ごろから日本語を話していた記憶

があります。自分が台湾人だとはしなかったのです。親が医師で順調に育てられました。小学校時代、日本語で話す五分間演説というのがあり、台中州で一番でした。それで自信がついたのです。いつも教師から『可愛いわ』ととても可愛い洋服ね』といわれたし、家庭教師もついていました。自分自身の実力と共に裕福な家庭があったのは確かです。彰化高女卒業後、日本の東洋女子齒科医専に推薦入学しました。医師だと往診があるので大変です。その点齒科医はないので、齒科に進んだわけです。四人のみの推薦でした。当時、寮生は寮で帯を締めるような風習でした。それが、入学後一年足らずで主人が求婚、性質は天真爛漫、二人とないと私の対する彼の評価に感激して、早速結婚してしまいました。

戦争中、日本の軍部の人には送迎がありましたが、台湾人にはないのです。この差別を指摘した時に、はじめて自分が台湾人だったと自覚したのでした。

戦後の外省人との関係を思うとき、時代は巡り宇宙は変わるとの実感が強いのです。私は平和を切望します。息子は国防医学院の医師です」

「台中高女の同窓会の会長をしています。戦前の日本の教育は成功だった、模範になると思っています。戦後、人々をリードしてきました。学友四千人に毎月パンフレットを出し

ているのでよろしく」

「公学校から彰化高女に進学。在学中は差別はありませんでした。教師になって補習科一年終わって十七人が試験を受けました。そのうち台湾人は五、六人いました。教員になって勤めた時、はじめて俸給に日本人の六割増俸をしり、差別に驚きました。四十七年勤め、そのうち小学校五年、中高等学校十六年、教務主任もしました。」

終戦後、漢文で教え、五年たって北京語を学びはじめます。夏や春の休暇や放課後に北京語を学ぶのです。市政府での講習会は厳しかったことを思い出します」

「台中師範の附属小学校に在学しました。台湾人は一人か二人だったのを覚えています。進学では台中高女を勧められました。しかし、私個人として考えたのです。台中高女は日本人のため、彰化高女は台湾人のための女学校。台中に入学するには家庭が財産家であることが必要、子供心に父は商売だから彰化を選ぼうと真剣に考えました。台中で落ちたら、高等科にも行かないと親にも教師にも主張し、結果的に彰化高女に進みました。入学してからは差別はほとんどありませんでした。十六回は二学級一〇二名、日本人四十五、六名で台湾人の比率が下がります。十七回からは三学級になりました。ただ私は、級長制度には疑問をもちました。なぜなら、

教師推薦なのですが、常に級長は日本人、副級長は台湾人だったからです。卒業後、補習科に進み検定試験をうけて国民学校の教師になりました。検定試験は十五人受けてそのうち五人が台湾人だったのです。日本人は台中市近く、台湾人は遠隔地赴任が多かったのでここにも少々待遇に差があったのではないのでしょうか。私が赴任した学校は、台湾人は私一人、他は日本人でした。結婚を機会に退職しましたが、光復後教師が不足し、懇願されて再び教壇に立ちました。中国語を学びながら、日本語・台湾語・中国語を混ぜながら、六年間勤務しましたが、体調を崩し退職しました。その後、婦人会に誘われて入会、その後国民党から立候補、八年半になります。女学校時代の先生方のことは忘れられません。感謝の心で一杯です」

「私は小学校から、台中高女に入学しました。入学試験には父兄のテストもあり、総合成績により入学を許可したようでした。先生方の中には、植民地政策に沿って忠実に行う先生と、ヒューマニズムの先生といました。ほとんどの生徒が日本人で、いろいろコンプレックスを感じましたし、先生によっても異なり、幼心に嫌な気がしました。旧制高等学校出身の先生で植民地政策に反感を持ち、理想をもって台湾に来たが、差別があり苦しいといって生徒に対して少

しでも平等にするようにしたいという先生もいらっしやいました。女学校一級六人の台湾人。上の学年は三乃至四人、この人数は校長によってことなり職権であったと思います。総括的にはよい教育を受けたと思っています」

「私は公学校から女学校を受けて不合格でした。祖父は日本人だったのですが、そこで一年補習科で勉強して女学校に進学しました。もともと困ったのは水泳の時間、水に入ると蕁麻疹になるのです。でも練習しました。是石という先生でしたので、石を蹴ってこれ石といっていた鬱憤を晴らしていました。卒業後代用教員の道がありましたが、親の薦めで検定を受けて教師になりました。四十年間子どものために、日本の中華学校の教師として勤務しました。今でも要請があれば日本語の教師をします」

「公学校では優等生でした。金の耳輪を付けて学校に行っていたのを思い出します。四年の時は洋服を着て、靴はワシントンの靴を履いていました。台中高女で授業料を集める仕事をしました。遅れて納付するのは日本人、遅れると恥ずかしそうにそっと置いていたのが印象的である。戦後二高女の事務をしながら洋裁を修めました」

「台中高女卒業後、一年課程の台中師範学校の女子講習科に進学、教師を二年やって終戦になりました。終戦直後は、

台湾語(漢文)で教え、五年経って北京語を学習しました。北京語の発音を一週間学習するのですが、女学校や中学校進学希望の受験組担当であったので一生懸命勉強しました。放課後はもちろん、夏休みや、春休みも北京語の講習でした。市政府の講習会は厳しかったと思います。その後肋膜炎になり、退職しました」

「日本女子大に進学し、卒業後結婚しました。夫は早稲田在学中だったので一九四一年に帰国。大東亜戦争勃発で、青年団の奉仕活動や篤志看護婦の時代でした。子どもは男三人が広島大学、神戸大学、琉球大学の医学部を出て、現在総合病院を経営しています。女は一人で神戸大学の卒業です」

「夫の兄の娘は彰化高女に推薦で入学し、終戦後、中国教育となります。夫は東京大学に留学し、子どもと共に東京に四、五年滞在し、娘の一人はそのまま東京に、二番目はアメリカ滞在です。夫婦はその後台湾で商売をしています」

「台中高女で思い出することは、台湾人の発音がはっきりしないどつと笑っていたこと、お弁当に塩漬け卵をもっていつて蔑視されたこと、共同風呂がどうしても入れなかったこと、お茶を飲むとき台湾人は音をたてる習慣があること等を思い出します。共同風呂にどうしても入れない人には配慮がありました」

「台湾人はどんなに優秀でも高等官になれないという人種差別がありました。そこで医者になる道を選ばざるを得なかったのです。女中さんのような卑しい仕事をしているのは台湾の人でした。小学校時代、友達がきて粽を差し上げ、お土産に持たしたのです。翌日それについて『美味しかった』と聞いたら、『台湾人が作ったのは汚いから捨てた』と聞いてとても胸が痛みました。その後は友達がきても何もあげないことにしました」

「当時、五十人中三人が台湾人でした。先生は私に嫌みをいいました。それは、ある日、帰りにいじめられたので、母にそのことをいいました。母はそれを担任にいったのです。あくる日、いじめた子を先生は立たせました。すぐその後『人をいじめる人はいけない。けれど告げ口する人は卑怯だ』ということを一時間中言っていました。その後は、母に告げることを止めました。」

旧暦のお正月でも授業はあります。台湾ではその日爆竹を外でならします。それを聞いて『あなた達のお正月でしょ。帰りたくない?』という言葉に、先生のいじめを感じました。提出物で甲上でも通信簿の成績となると乙でした。台湾人の生徒の親は、医者や弁護士が多かったのですが、家は建築関係だったので矛先が向けられたのかもしれませんが。一般に石

屋にたいする侮蔑がありましたから……。総体的には女学校教育は良かったと思うのですが、このように思い出すとつぎつぎと差別された辛かったことが思い起こされます」

注

筆者は「平成十年度科学研究費補助金研究成果公開促進費」の交付を受け、『植民地台湾の高等女学校研究』を多賀出版から一九九九年二月に刊行する。そのⅥ章に「インタビュー調査から見た女学生生活とその後」と題して、本論文ならびに前年度の論文を資料として活用した。なお、それにつきの人々のインタビューを加えた。

○改姓名を拒否したジャーナリストの子女

○米軍の台湾上陸阻止のため重慶に赴く女性

○州管轄の学校に赴任してきた日本人校長を称える教え子

○領有初期に殉職した六士先生の子孫

○幼児を台湾語で教育する自由学園卒業生の園長

以上の理由で、紀要論文を未了のまま筆を擱くことを付言する。

(人文学部英文学科教授)